

シリーズ第4話

「子どもの急な発熱」 正しい知識とその対処法



新城市民病院 小児科
部長医師 影山里実

プロフィール
出身地： 新城生まれの新城育ち
出身大学： 京都府立医科大学
趣味： 山歩き・ジムカーナ

子どもはよく高熱を出します。そのほとんどは、体内に侵入したウイルスなどの病原体を退治するための正常な防衛反応です。

受診した方が早く熱が下がるだろつ」という期待の2つがあると思います。

に関しては、子どもの発熱

どんなに丈夫な子どもでも、小学校にあがるまでに最低数回は高熱を出します。高熱は不愉快な症状ですが、子ども自身の力で免疫力を獲得するためには避けて通れません。脳炎・脳症（必ず意識障害・けいれんを伴います）でも合併しない限り、高熱のみで脳に後遺症を残すことはありません。

の約95パーセントは単なるカゼ（ウイルス感染）で、ほとんどが自然に治ります。一方、抗生剤治療の必要な細菌感染や、川崎病など入院が必要な病気の可能性も約5パーセント存在します。お母さん方がそれを見分けるのは難しいと思いますので、発熱2日目には病院受診をお勧めします。ただし、発熱当日では小児科専門医でも「ただの力

ない、初めての痙攣などは例外です）
に関しては、子どもの発熱の約95パーセントはウイルス感染なので特効薬はありません。（インフルエンザ・水ぼうそうは例外です）残念ながら、早く病院に来たからといって、早く治るわけでもないのです。一般的なウイルス感染に対し小児科医が処方するのは、対処療法（咳・鼻水や下痢など、不快な症状を和らげる）の薬です。

最後に、解熱剤の使い方について述べます。「身体の正常な防衛反応を邪魔するから、むやみに使わない方がいい」というのが小児科医の一般的な意見です。しかし、夜間に体温が38.5以上あり不機嫌で全く寝付けない時などに、「一時的に熱を下げ、病気に立ち向かう体力を温存させよう」という考えが間違っているわけではないので、実際に私自身も娘に使用したことがあります。アセトアミノフェンという薬が最も安全で、生後6カ月以上の子どもに使用可能です。坐薬やシロップ製剤が民間薬局でも市販されています。小さな子どもがいるご家庭では常備しておき、いざ子どもが夜中に発熱したときに用いて、とりあえず一晩をしのぐことも現実的な方法です。

発熱時、病院にかかる理由には、「ただの力ではなく、なにか重症の病気が隠れていないか」という心配と、「早く

発熱2日目には病院受診をお勧めします。ただし、発熱当日では小児科専門医でも「ただの力



最後に、解熱剤の使い方について述べます。「身体の正常な防衛反応を邪魔するから、むやみに使わない方がいい」というのが小児科医の一般的な意見です。しかし、夜間に体温が38.5以上あり不機嫌で全く寝付けない時などに、「一時的に熱を下げ、病気に立ち向かう体力を温存させよう」という考えが間違っているわけではないので、実際に私自身も娘に使用したことがあります。アセトアミノフェンという薬が最も安全で、生後6カ月以上の子どもに使用可能です。坐薬やシロップ製剤が民間薬局でも市販されています。小さな子どもがいるご家庭では常備しておき、いざ子どもが夜中に発熱したときに用いて、とりあえず一晩をしのぐことも現実的な方法です。